

カメセミナーS-3

ニホンイシガメの生態と現状

小菅康弘 (NPO法人カメネットワークジャパン)

Current status and ecology of the Japanese pond turtle, *Mauremys japonica*.

Yasuhiro KOSUGE (*Freshwater Turtle Network of Japan*)

ニホンイシガメ *Mauremys japonica* (以下、イシガメ) は、基礎的な生態について研究され、メスが体サイズでオスより大きくなることや、雌雄それぞれの性成熟サイズ、また、河川における越冬場所、季節的な移動や行動圏などが明らかとされてきた。発表者らの研究からは、房総半島の一河川流域において、流呈分布に季節的な偏りがみられることや、上流域から下流域に広範囲に分布することが明らかとされてきた。しかし、近年では、河川改修や水田や溜池の放棄などの生息環境の悪化に加え、外来ガメの侵入による競争などにより、全国各地で生息数の減少が指摘されている。

発表者らが1990年代より、カメ類の調査を実施してきた房総半島の小河川において、2008年に、例年がない105個体というイシガメを含めたカメ類の大量死体、および四肢等欠損個体が発見された。これらの現状を踏まえ、他の流域を含め被害調査を拡大して実施したところ、四肢等欠損個体が広範囲で確認された。原因について、周囲で発見された哺乳類の足跡の状況から、タヌキ *Nyctereutes procyonoides* 等の在来哺乳類と外来種アライグマ *Procyon lotor* が一因とみられたが、最近大きな環境変化がなかったことと、アライグマの生息確認とカメ類の深刻な被害の時期は一致したところから、アライグマが最も関係していると示唆された。

その後、2013年まで継続して調査をしたところ、個体数で、クサガメ *Mauremys reevesii* が徐々に復活する傾向がみられたが、イシガメには復活の兆しがみられない。今後もイシガメが復活できなければ、イシガメは同種の雌雄が会う確率がさらに低下する。2種間では雑種化がさらに浸透し、外部形態上、雑種とみられる個体と、クサガメと判定されるカメと集団となってしまう、純粋なイシガメが存在しなくなる恐れがあり、たいへん危惧される。外的要因によって、個体数が減少した場合、2種が同所的に生存している地点において、イシガメの復活は難しく、クサガメがより優占する傾向がみられた。今後、アライグマとクサガメを防除し、イシガメが復活していくための計画を早急実践する必要がある。

